



令和6年12月19日、区内の福祉関係者や大学生が分野の垣根を越えて、次の50年を見据え、「つながりあい・ささえあいのある地域づくり」や「社会的孤立の解消に向けて必要なこと、できること」などについて、水野一裕区長とともに語り合いました。ファシリテーターは、天白区社会福祉協議会事務局長 名内丈資さんです。

【お集まりいただいた方々(敬称略)】

・天白区区政協力委員協議会	議 長	山 田 敬 一
・天白区民生委員児童委員協議会	副 支 部 長	林 雅 子
・天白区民生委員児童委員協議会	主任児童委員	村 瀬 裕 子
・天白区子ども会連合会	会 長	浅 野 香 代 子
・天白区障害者自立支援連絡協議会	会 長	飯 田 幹 雄
・天白区社会福祉協議会	事 務 局 長	名 内 丈 資
・天白区社会福祉協議会	事 務 局 次 長	瀬 戸 口 治
・名城大学	学 生	桑 原 実 佐 都
・東海学園大学	学 生	佐 々 木 悠 人
・豊田工業大学	学 生	樋 口 莉 美
・天白区役所	区 長	水 野 一 裕



孤立は世代・分野を問わず身近にある

山田 地域では高齢者の孤立や孤立死について耳にすることがあります。地域や仲間とのつながりがあれば、未然に防いだり、早く気づくことができるのかもしれませんが。

林 民生委員は65歳以上の一人暮らしのお宅に訪問しますが、月に1回程度であり、訪問を拒否されるケースもあります。普段から身近な人とつながっているということはすごく大事なことだと思います。

村瀬 主任児童委員は、第一子が生まれた家庭に訪問させていただいています。子育て世代は転居や出産直前まで働いているという背景から、地縁がなく「孤育て」になっていることがあり、育児の困難感を抱えている方もいます。インターネットの情報のみを頼りに子育てをしている方もおり、心配しています。

飯田 障害者や障害者のいる世帯が少しずつ地域で受け入れられるようになってきていますが、まだ日が浅く、地域のつながりが行き届いているとは言えないのが現状です。孤立している世帯は障害者を隠すという時代に生きてこられた人が多く老障介護となっている世帯もあります。

樋口 新型コロナウイルスの影響で対面でのプログラムが制限され、孤立を感じるがありました。高校2年生の時に、大学の授業を体験できるプログラムがオンラインでの開催となり、他の参加者と一緒に話をすることができ、交友関係を広げることが難しかったと感じました。私は

若い世代ではありますがオンラインでは友達を作ることには難しいと思いました。



多様につながる・ゆるやかにつながる

山田 町内会の加入率が低下しています。地域では様々な行事を行っていますが、回覧板やお知らせなどは加入者を対象としており、災害時の安否確認においても町内会組織を活用します。未加入者や地域行事に参加されない方の中にもSOSを発信している方はいます。顔と顔を合わせる地域行事だけでなく、回覧板や掲示板、インターネットでの情報発信など、その人に応じた様々なつながり方が必要です。そして、「向こう三軒両隣」と言うように、身近で小さなつながりが連なって大きな輪ができることを願っています。

浅野 子ども会の加入率も町内会と同様に低下しています。共働きの家庭の増加や少子化ということもありますが、それを言い訳にはしたくありません。子ども会の活動から地域へとつながりの輪を広げるだけでなく、活動を通じて担い手として活躍していただいたり、お互いにいたわり合える関係につながっていくことを希望しています。



村瀬 町内会、子ども会の加入率が低下している現状や制度の行き詰まりから、次の子ども世代に合わせて、つながり方も多様なアプローチがあっていると思います。大きくつながるだけでなく、それぞれで、小さく、ゆるやかでおおらかに、そして、縦と横、斜めにつながるといった関係性を、一步一步積み重ね、次の世代につないでいくことが大切です。

佐々木 ICT の活用も注目されていますが、私は、顔と顔を合わせることが人間としての本質的な部分であると捉えています。今所属している NPO 団体のミーティングでは顔と顔を合わせる話し合いを重視しており、オンラインを活用したことはありません。主要なものとしてではなく、意見やアイデアをまとめるといった補助的なものとして活用すれば時短にもなり有効性があると考えています。

桑原 同世代の方々との交流はもちろん大切ですが、世代を超えて交流できる場があるとお互いに楽しくなる、気持ち前向きになるといった変化をもたらすと思います。

樋口 地域とのつながりの中に、「第3の居場所」があるのもいいと考えています。自宅や学校だけでなく、飾らずにありのままで過ごすことができる場所があると楽しいはず。第3の居場所を地域の中に作ることで良いたと感じています。

飯田 天白区では、障害者の地域への発信として「顔の見えるアート展」を行っています。区役所や原駅の地下鉄駅構内のギャラリー、図書館、農業センターなどで作品を展示するとともに、WEB 上でも公開して様々な人に見ていただけるように工夫しています。それ以外にも映像を通じた発信として「シネマでみるふくし」や当事者によるステージ企画、授産製品の販売にも力を入れています。障害者は支援の対象ではありますが、いろいろな力を持っていて、それが人間としての当たり前前の姿だということを見てもうきかけとしています。

生活上の困りごとへの気づき

瀬戸口 天白区では令和6年4月から重層的支援体制整備事業がスタートしました。複合的な課題を抱える世帯に対する支援を、関係機関と共に考え、少しでも解決に近づけていこうというものです。支援対象には、地域から孤立している世帯も多くありますが、はじめから孤立していたわけではありません。家族との離別や失職、病気といったライフステージが変化して、家族内や人とのつながりの中で解決できていた問題が解決できなくなり、少しずつ孤立していく。その結果、様々なことをあきらめ、周りを頼らなくなっていくことがあります。

山田 ある年代以上の方は、「人に迷惑をかけない」という教えの中で育ってきた経緯もあります。そうすると本当に困っていても SOS を出してくれない方もいます。

林 いわゆるゴミ屋敷など見えやすい課題と、見えにくい課題があると思います。私は何か特別な資格があるわけじゃないですが、見えにくい課題を抱える人に対しては日常のお話の中で気づき、必要な時には相談機関につないでいけるようになればいいと思っています。日頃から近所の人とつながりを持つことが大切になってくると思います。

村瀬 地域には行政の支援を拒否する方もいます。専門機関だけが支援を担うのではなく、地域の小さなつながりや助け合いの中で気づき、身近な相談者として存在をアピールしておき、困った時に声をかけてもらうといったつながり方が、かえって近道ではないかと思っています。



共生社会の実現に向けて必要なこと

林 つながることが「楽しい」になるといいですね。若いママやパパが楽しいイベントに子どもと一緒に参加できたり、高齢の方が楽しく参加できるというような社会になるように考えていくことが大切です。そのためには、ご近所さんと仲良くして何かある時に声を掛け合うとか、そういう普段のちょっとしたことから始めることが大切だと思います。

桑原 人に頼りにしてもらえるとすることはすごく自分の存在意義を実感できる大事なことだと思います。年齢を重ねても今まで培ってきた経験をもとに誰かに教えたり、頼りにしてもらえる機会があると、より良い共生社会になるのではないかと思います。



浅野 現在、膝を痛めて杖をついています。今までは感じてなかったことですが、杖をつくことによって人の温かい目が注がれるのに気がつきました。杖をつきながら歩いていると、近所の人声が声をかけて労ってくださいました。その半面、人の目が気になることもあります。障害のある方に対する視線を自分になってみてはじめて感じました。公にしたい気持ちとしたくない気持ちの両面をわかっていただける社会であると非常にありがたいと思います。

樋口 私自身1型糖尿病を抱えています。そのことをオープンにすることで、周囲から気遣ってもらえたり、こういう人が身近にいと周りの人に認識してもらうことができました。障害のある方も自分から発信することには抵抗があるかもしれませんが、社会に発信することで認知してもらえる部分があるので、オープンにしていくことも大切だと思います。

佐々木 私はボランティアの中で、障害のあるお子さんと関わる機会が多くありますが、小学生でも見られているという、意識を持つ子が圧倒的に多いと感じます。保護者さんも住んでいる地域の中で見られていると感じてしまい、考えてしまって苦しいということもあり、地域とのつながりに対して壁を作ってしまうこともあると思います。当事者や家族の気持ちに寄り添いながら、時間がかかってもその壁を取り除く方策を考えていくことが重要だと思います。

村瀬 地域の中で「間違えてはいけない」というような風潮があり、それがいろいろなものを停滞させていると思います。あくまでも私たちは普通に暮らしている人たちであり、様々な立場の、いろいろな考えを持った人たちが一緒に暮らしていることから、間違いが起こるのは当たり前で、失敗するのは当たり前。世の中全体がおおらかに雑でいいと思います。すぐに間違いを指摘するような状況がすべての人を息苦しくしています。子どもたちを見ても、大人の価値観でいろいろな価値観が押しえつけられている部分があります。大人自身が全体的におおらかにやっていくことが共生社会につながっていくと思います。

飯田 そうした息苦しく暮らしにくい要因は、今の社会の価値観にあると思います。経済的成長を唯一の価値とし、格差は広がり、寛容さはなく、すぐに優劣つける。その真逆のポジションにいるのが障害者です。だから私たちは積極的にアピールしています。芸術的な活動もできるし、社会経済活動にも参加できるし、地域で何らかの援助もできることを。今の一般的な価値観だけでは人間の価値は決められない。そして、支援は一方的ではなく、必ず相手の状況に応じて教えられる部分があることを共通認識できれば、共生社会やお互いの人間性を尊重し合える関係を生み出す基礎になると思います。

村瀬 長久手市に「ゴジカラ村」という共生社会の理念が根づくエリアがあります。そこには、幼稚園や専門学校、高齢者施設などがあり、子どもたちが高齢者の近くで遊び、そこに若い親が関わり、学生や元気な高齢者が子どもを預かるスタッフとなり、それぞれが自分のできることを少しずつ出し合って過ごしています。うまくいかないことや意見の対立も多くありますが、「まあしょうがないか」という、おおらかな風土の中で、お互いに折り合いながら、そして、困っている人に気づき合い、協力し合える関係性がある不思議な場所です。暮らしを作るのではなく、地域の普通の暮らしが自然に発生するような仕組みがあり、それぞれに任せながら、あらゆる存在の人、立場の人がいて良い場所が必ずあるという一つの事例です。

次の50年を見据えて

桑原 専門知識の有無に関わらず今の自分にできることは何かということを考えながら活動していくことが大事だと思います。

佐々木 障害のある方へのボランティア活動を通じて、障害への理解促進のための発信を続けることで、より多くの方に認知していただき、そして、その活動を後輩につないでいきたいと思います。

樋口 大学生活の中で福祉に携わることは多くありませ

んが、皆さんの意見を聞いて地域のつながりは絶対に必要だと感じています。私たちの世代は1人でいることも楽しいと思うところがありますが、それでも、少しずつ関係性を作っていくことの大切さを伝えていきたいと思います。

浅野 みんなから助けていただく分、私は子ども会の活動を通じて恩返ししていきたいと思っています。

飯田 本日のように様々な分野の方と交流できるのは天白区の良さだと思います。私は、共生社会とは誰にとっても暮らしやすい社会と表現しています。お互い生きていくにはその方が楽なのではないかと最近思うようになりました。そんな地域に天白区になるきっかけになれば50年後も期待できるかなと思います。

瀬戸口 50年前を思い返すと、私も地域の方に声をかけられて育ってきたんだと感じています。次の50年はどんなつながり方になるかわかりませんが、ICTが発展したとしても、人と人のつながりがあって人間はより良く生きていける、そこは変わらないのではないかと思います。

村瀬 今まで町内会や子ども会のみなさんにお世話になり、現在、主任児童委員として活動していますが、町を歩いているとたくさんの方と出会い、挨拶ができます。これはすごく幸せなことだと感じています。様々なことを依頼されることがありますが、できるだけ楽しそうな顔をして取り組んで、生きていることは楽しいことだと思ってもらえるように、次の世代にはそれを伝えながら地域のおばちゃんをもう少し続けたいと思います。

林 私自身楽しく生きることを心がけていますし、これからもゆるく生きていこうと思っています。「生きていることは楽しいことだよ」と伝え、つないでいくことはとても大切なことだと思います。これからも伝え続けたいと思います。

山田 支える側、支えられる側ではなく、「子供を叱るな来た道だもの 年寄り笑うな行く道だもの」という言葉があるように、お互いさま、おかげさまの精神が大切です。それが50年後にもつながっていくことで必然的に共生社会につながっていくと思います。また、年齢を重ねても役割を持ち続けられる世の中になっていると良いと思いますので、その方策も考えていきたいと思います。



おわりに

私たちが暮らす地域に、「支える側」、「支えられる側」という一方向ではなく、助けられる側にも、助ける側にもなれる「お互いさま」の精神が根づいていくこと。そして、困りごとを自ら発信できるだけでなく、発信された困りごとを誰もがいかりと受け止められる寛容でおおらかな地域づくりを経て、共生社会の実現につながっていく。